

熊本地震における災害時の国際コミュニケーション

小野寺 妙子^{*1},

^{*1} 帝京平成大学 地域医療学部

International communication at the time of an accident in the Kumamoto earthquake

Faculty of Community Health Care, Teikyo Heisei University^{*1}

2016年4月の熊本地震で被災した外国人の行動についてオリジナル ICT 教材にして授業を展開した。

アメリカ在住で配偶者の実家が熊本であり、帰省中に被災したときの行動や思いをインタビューし英語で動画に残した。その内容を大学生の「オフィスコミュニケーション」の授業のシラバス「国際化時代のコミュニケーション」の中で、コミュニケーションにおいて何が不足しどのようなコミュニケーションを被災地でとったかを紹介したことに基づいて考察した。

キーワード: 熊本地震, 外国人と災害, ICT 教材 災害時コミュニケーション

1. はじめに

2016年(平成28年)4月14日午前9時26分に熊本大分一体に発生した地震によって多くの被害があった。その被災者には日本人のみならず外国語しかわからない外国人も存在した。熊本に実家がある日本人とその夫(米国人)が丁度帰省途中に被災をした。そのときに外国人が日本で被災した際にどのような行動をとりどう考えたかを学生に紹介をすることにした。

「国際化時代におけるコミュニケーション」・「災害時のコミュニケーション」・「言語が通じない場合のコミュニケーション」を考える材料にした。

社会で生じる出来事を直視して何が問題でどのような解決策があるかを考察する事例を通して、大学で必要とする十分な知識・技能を持ち、それを活用できる思考力・判断力・表現力を臨機応変に発揮でき、主体性をもって多様な人々と協力する力が養われることを目標にした授業に関して報告する。

2. 研究概要

2.1 研究の目的

本研究は医療スポーツ系学生のコミュニケーション

能力向上のための教材開発の一つで、国際化時代におけるコミュニケーション力を向上する目的がある。

2.2 研究の方法

被災した2名について倫理的配慮をとり、本人が許可したビデオでの映像に英語でインタビューをとり学生、および研究機関に視聴可能な許可を得た。

米国人の夫妻のうち妻1名は熊本県出身で実家がある。夫は米国人で来日は2回目で日本語は挨拶程度の片言だけ理解可能である。

インタビューは被災後同年6月に妻が夫へインタビューをするという形式でスマートフォンにより撮影された。聞きたいポイントはあらかじめ妻へメールで送信した。

約25分のインタビュービデオが作成され、学生のICT教材に使用できるように、パワーポイントに埋め込んで、シートに2~3分ずつにわけて随時日本語訳をつけて、英語が堪能でない学生にも理解できるようにした。

学生には、この授業の2か月ほど前に医療英語が必要かどうかをアンケートをとった。ビデオ視聴後にはどう意識が変化したかを調査した。また視聴後には自

由記述で調査した。

- 1) 調査対象：看護科3年103名と医療スポーツ系学生47名合計150名
- 2) 調査方法は記名式のアンケートと自由記述
- 3) アンケートは2回（国際化コミュニケーションの授業をする前）と（本研究教材を視聴後）
- 4) 調査項目は医療英語の必要性についてどのように思いましたか？3つのうちから1つ選択
 - 1 流暢な英語が必要
 - 2 最低限の単語や会話が必要
 - 3 英語は必要ない

2.3 ICT 教材の内容

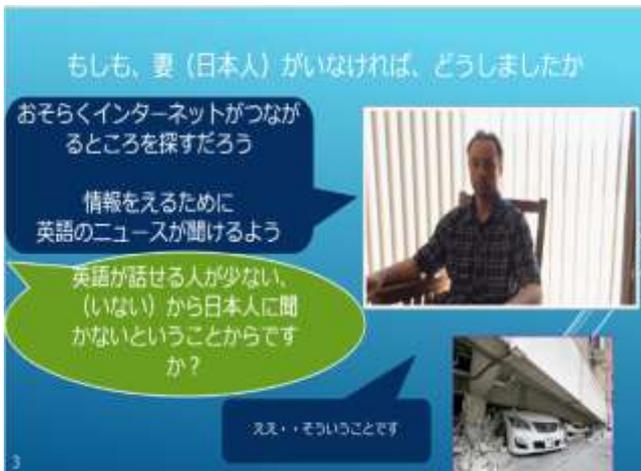


図1 熊本震災におけるコミュニケーション教材 1

- ・ビデオを埋め込んだ Powerpoint に問題提起、翻訳を入れ込んで配信。
- ・外国人が主体的に震災破損部分を修繕し、国際コミュニケーションを民間でふれあい助け合うこともインタビューと写真で紹介した。



図1 熊本震災におけるコミュニケーション教材 2

表 1 視聴覚ビデオ powepoint スライドの内容

シーン	どうであったか
視聴 point を紹介	被災者の中の外国人
いつ被災したか	福岡から熊本へ行くとき
夜行バスの中で	警報の意味わからず
地震の情報	外国の父からのメール
妻が日本語がわからないとしたら	インターネットで情報を得るだろう。アナウンスがわからないから。
日本人に聞きま	日本語がわからないから聞かすか
熊本に到着	人々は2日ほど落ち着いていた
熊本でしたこと	妻の家の状態をチェック
	修繕資材を調達するのが言語の壁で困難だった。和風建築の知識も少なかった
彼が考えたこと	崩壊を目の当たりにし、力を合わせて自分の力で助けたいと思った
困ったこと	日本語の市役所のアナウンスが理解できたらよかったのにと。思った。

3. 結果

3-1 アンケート：医療英語の必要性についてどう思いましたか

- ・ 1回目:

看護科：5月26日（国際化のコミュニケーションの必要性を話したあと）

N=103（看護科3年生男子 n=19 女子 n=94）

医療スポーツ・救命救急・作業療法学科：

N=47 11月11日（男子 n=31 女子 n=16）

- ・ 2回目 ICT 教材視聴後：7月21日

n=103（同）

医療スポーツ・救命救急・作業療法学科：

N=47 11月11日（男子 n=31 女子 n=16）

表2 アンケート結果

看護・医療スポーツ n=150	1回目	2回目
流暢な英語が必要	19.2%	16.6%
最低限の単語や会話は必要	76.2%	80.8%
英語は必要ない	2.6%	0.7%
無効	2.0%	2.0%

医療スポーツ n=47	1回目	2回目
流暢な英語が必要	35.4 %	37.5%
最低限の単語や会話は必要	56.3 %	58.3%
英語は必要ない	2.1%	0%
無効	4.2%	4.2%

看護科 n=103	1回目	2回目
流暢な英語が必要	11.7%	6.8%
最低限の単語や会話は必要	85.4%	91.3%
英語は必要ない	1.9%	1.0%
無効	1.0%	1.0%

看護科と医療スポーツ系学生を合わせて、ビデオ視聴する前と後を比較すると、「流暢な英語が必要」が看護科では 4.9%減少し、医療スポーツ系では 1%増加、「最低限の単語や会話は必要」に関しては看護科では 5.8%増加し医療スポーツでも 1.0%増加している。「英語は必要ない」とは両者ともに視聴後には減少した。

まとめ

ICTによる視聴覚教材を視聴前より「流暢な英語・最低限の単語や英会話が必要」という意識は高かったが、「英語は必要ない」と感じていた学生がわずかながら減少したことに意義があった。

また、無効に属するものも英語は必要であると記述していることから、英語が必要ではないというものが少なくなったといえる。

今回は数字として大きな変化は見られなかったが、ビデオをみてどのように思ったかを次回としたい。

視聴後に「災害時の国際化コミュニケーションについてどのように考えたか」を約200字で記載内容より今後は自由記述をした感想から学生が ICT 視聴後にどのような意識を持ったかを調べたいと思った。

謝辞

被災をして身体的にも心身的にも疲れているインタビュアーと答えていただいた方に感謝申し上げ、被災地において、国を超えて家の修繕等の手助けをしてくれた行為とそれを学生のために話してくれたことに感謝します。

参考文献

- (1) 成瀬かおる・網野寛子: “医療連携教育の一考察”, 帝京平成大学紀要, Vol.24, No.2, pp.405-412 (2012)
- (2) 林康弘・小野寺妙子: “医療スポーツ系学生のコミュニケーション能力向上のための教材開発と実証”, 第 41 回教育システム情報学会全国大会発表論文より (2016.8)